

# 令和5年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【春野小学校】

⑥ 次年度への課題と改善策	
知識・技能	・国語においては、多くの学年で「知識・技能」は「思考・判断・表現」の結果を下回ることとなった。文字を書くことと自身が活動の多くを占める場合、実際に紙に書く経験を増やす方がよい結果を生んだため、ICTの活用を引き続き推進しつつ、有効な場面を見極めて、書く活動を重視していきたい。 ・特に算数において、前学年までの内容に不安がある児童へのフォローとしてのICT活用は効果的であった。
思考・判断・表現	・考えを伝え合うことで、比較・検討する場面を多く経験したことで「話すこと・聞くこと」について成果が見られた。「書くこと」に関しても、自分の考えを書いて伝えること、相手の考えを読んで理解することの両方の場面を意図的に設定することで、向上を図りたい。
主体的に学習に取り組む態度	・「主体的に取り組んでいる」と児童が感じているにもかかわらず成果がふるわない状況といえる。まず「主体的に取り組む」とはどんな姿か教員と児童が改めてイメージを共有し、その上で上記2観点を向上させる手立てを再検討していく。 ・6年算数において習熟度別の指導を行う。自らの学習状況を把握し主体的にコースを選択するならば、上記2観点の向上が期待できる。

① 目標・策		
	目標	策
知識・技能	・R5年度全国学力・学習状況調査の国語・算数・理科の「知識・技能」において全国平均の前後5pt以上とする。 ・学校図書館の図書貸出数を前年度以上にする。 ・国語の「知識・技能」領域の自校テスト正答率を80%以上にする。 ・算数の「数と計算」領域の自校テスト正答率を80%以上にする。	⇒ ○全学年の業前活動として設定した「基礎の時間」や授業で、国語については意味調べ、漢字練習等、算数については計算練習等に取り組む。 ○「ICTタイム」において児童が自分自身の課題に向き合い、問題を選択して取り組めるようにする。
思考・判断・表現	・R5年度全国学力・学習状況調査の国語・算数・理科の「思考・判断・表現」において全国平均の前後5pt以上とする。 ・算数の「思考・判断・表現」領域の自校テストにおける正答率を80%以上にする。	⇒ ○児童主体の「さいたま市『アクティブ・ラーニング』型授業」を行う。 ○思考を可視化して表現し、考えを伝え合うことで、比較・検討する協働的な学びの場を設定する。 ○授業のユニバーサルデザイン化を図る。
主体的に学習に取り組む態度	・R5年度全国学力・学習状況調査及びさいたま市学習状況調査「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」の質問項目において、肯定的な回答の割合を80%以上にする。	⇒ ○「課題を見つける力」をつけることで主体的に学習に取り組めるようにする。国語科のみならず、他教科へも広げていく。 ○児童主体の「さいたま市『アクティブ・ラーニング』型授業」を行う。

<小6・中3>(4月~5月)

⑤ 目標・策の達成状況		評価(※)
知識・技能	・「全国学力・学習状況調査の全国平均の前後5pt以上」については達成できなかった。 ・算数においては、どの学年も「知識・技能」の結果が「思考・判断・表現」を上回る結果となった。業態に設定したICTタイムをはじめ、タブレットを使用し問題を解く機会を多くもてたことが関係していると思われる。	C
思考・判断・表現	・「全国学力・学習状況調査の全国平均の前後5pt以上」については達成できなかった。 ・自校テストの結果から算数ではどの学年においても「知識・技能」が目標より-15p程度の結果となっていることが分かった。一方、国語では半数の学年が目標を達成している。 ・活動の様子から、「話すこと・聞くこと」については力をつけていることが伺えるが、学習状況調査の結果から「書くこと」について課題があることが分かった。	C
主体的に学習に取り組む態度	「これまでの授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。」の設問に対し、5年生は81.9%が、6年生は85.5%が肯定的な回答をしていた。「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」についても5・6共に78%であった。	A

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

② 全国学力・学習状況調査結果・分析	
知識・技能	国語において、漢字の使い分けや、情報同士の関わりをとらえることについて改善の余地がある。算数についても「データの活用」で同様の傾向がある。
思考・判断・表現	国語において、文章にまとめる問題について課題がみられた。指定された条件の読み取りや、言葉遣いについて改善の余地がある。算数においても同様に「面積の大小を判断し、理由を記述する」問題において大いに課題がある。
主体的に学習に取り組む態度	国語においては全無回答の半数が、算数においては全無回答の2/3がおよそ1割の児童によるものであった。全体への指導に注力すると同時に、少数の児童への対応も進めていく必要がある。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④ さいたま市学習状況調査結果・分析 ※令和5年度のさいたま市学習状況調査結果は参考値扱いとなります。			
小3	中学年は、高学年と比べて無回答率が高い傾向にあった。3年生は特に、国語において無回答率が非常に高い。観点では「思考・判断・表現」について、粘り強く取り組めるような働きかけが必要である。突出して苦手と言うような分野はなく、全体的な底上げが必要である。	小4	国語・算数共に、昨年度の自分たちよりも偏差値が3p程度上昇している。突出して苦手と言うような分野はなく、全体的な底上げが必要である。
小5	「話し手の意図をとらえながら聞き、効果的に助言をすることができる。」内容の複数の設問について、誤答がほぼ均等に分布している。何が間違っているか自信をもって決定できない状況であり課題が残る。「単量あたりの大きさ」は正答の割合が一番少ない状況であり、概念について押えていく必要がある。	小6	昨年度の自分たちよりも偏差値は2p上昇しているが、苦手な分野の傾向は変わっていない。国語の領域の中では「話すこと・聞くこと」に課題がみられる。算数では「データの活用」が他よりも課題と言えそうである。

③ 中間期見直し(全国学力・学習状況調査結果分析後)		
	目標	策
知識・技能	自分の課題を把握し、苦手分野を克服する。基礎知識の定着を図る。	⇒ 校内テストの結果を踏まえ、希望する児童を対象に放課後勉強会を開く。まず6年生を対象とし、方法を検討しながら他学年へ広げていく。
思考・判断・表現	学習の記録を活用し、課題解決への道筋を考えられるようにする。学習のアウトプットの機会・方法の拡充を図る。	⇒ ICTを活用し、学習の記録を残す。振り返る機会を持つ。発言・資料作成・文章によるまとめ等、様々な方法でのアウトプットを経験する。AIの活用も視野に、多様な表現に触れる機会を持つ。
主体的に学習に取り組む態度	知識・技能の向上により、学習に向かう態度の向上を図る。	⇒ 校内テストの結果を踏まえ、希望する児童を対象に放課後勉強会を開く。まず6年生を対象とし、方法を検討しながら他学年へ広げていく。